

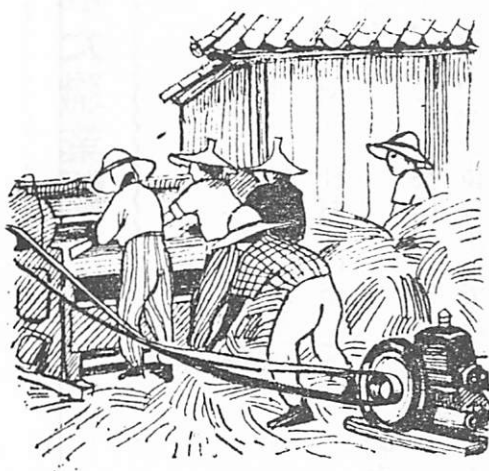
特
集

日本農業の実態

福島 要一

栽培の学習指導案

中村 邦男



◇ 中村氏の提案をめぐつて (座談会)

◇ ロスアンジェルスの

小学校における工作教育 (海外紹介)

◇ ブックレビュー・支部規定・研究会便り

NO. 12

— 1952・10 —

映画「生きる」に現われた職業観

映画「生きる」は、羅生門で世界的に有名になつた黒沢明の作品であるが、勿論、職業観などを現われそうとしたものではない。偶然にも私のような見物がいて、そこに、一つの職業観を見出したまでのことで、こんな所にかくのもどうかと思うがいつも、いかめしい面構えばかりではなく、時には少しくだけたものもよからうかと思つてかいて見ることにした。

○

この映画の主人公は、三十年勤続の公務員である。すでに年数によつて市民課長となり、来る日も来る日もハンコを押しているだけで、時間のすぎるのだけを待つてゐる。何の

楽しみもなく、營々として意屈な毎日を勤め、子供は生長して嫁をもらつたが、親に対する仕打ちに至つて冷談である。

その上、この主人公は、自分が胃ガンであつて、半年位の生命であることを知る。絶望と懊惱の果、初めて自分の金で酒のみ、亭楽街をさまよう。そして同じ役所の下役であつた女事務員が、こんな怠くつなだらぬ職業をやめて、物を作る女工に転じたのを知つて、そのハッラツたる「生きた姿」に心ひかれていく。

その果は、何か作る仕事をやればよいとその若い女に示唆されて、俄然勇猛心をふるい起し、街の人たち

が陳情に来てもととりあわなかつた、埋立地を小公園にする仕事に熱中し、それを仕上げて大雪の中に死んでいく。

○

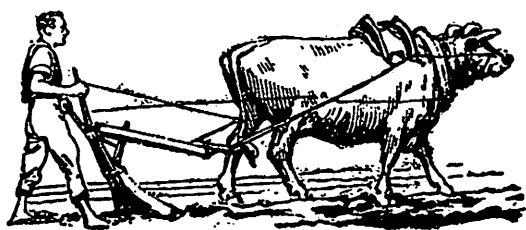
現在社会機構の中における公務員の仕事は、全くミイラのように下らなく(この映画は随分皮肉つてゐる)物を生産する職業が、いかに「生きたものかを、この映画が偶然にも示している。

勿論、物を生産する職業も、現在の社会では、完全に生きた仕事となつていない。その前に動物的に食糧を得るために、イヤな仕事も強いられる。とはいへ、不生産的な寧ろ反人民的な立場の公務員などより一脈の生命を持ち、社会の動脈にながつてゐるのは、生産に直結する労働者や農民ではないだらうか。

生きる！ 職業教育もこの観点から見ていきたい。(池田重生)

日本農業の実態と生産教育

福島 要 一



はじめに

日本の農業がどんな状態におかれているかを理解するために、私は二つの観点から述べて見たい。その一は終戦後の農地改革の評価であり、

その二は、農村の階層分化の問題である。

それに関連して、私は教育については全くの素人ではあるが、最近見たある学校の生産教育計画について一言ふれて見たいと思う。

一、農地改革の評価

農地改革は、昭和廿年十二月のGHQの指令によつて推進され、統計的には不在地主や大地主がなくなつて、小作人はわずか五%に激減した。そこで、山林の解放や用水権の問題は別として、^{ひらば}平場農地に関する限り、農地改革は完了したというのが一般の考え方である。

農地改革が果して完了したかどうかを評価するばあいそれがなぜ行われたかということに関連するが、ともかく農地改革は、日本の農民の生活を楽にするのが目的であつたということから展開すれば明瞭になる。では日本の農民の生活は楽になつたかどうか。

元来日本の農業は単純再生産でいくら働いても結果として何も残らないというのが特ちようであつた。第1図はそれを図示したものである。図において、残をゼロならしめている主な負担は、反收の半分にも相当する小作料である。これが生活が苦しいのは当然でそういう状態の農業を拡大再生産へ移行させようとして農地改革が行われたのである。従つて、拡大再生産に移行しなければ本当の農地改革が行われたので

残	=	支出	-	入	×	收
○		生活費 生産費 小作料 地代		価 格		生 産 高

第 1 図

はないというのが私の基本的な考え方である。

ところが現状では、日本の農業が拡大再生産に移行したとは誰もいつていない。従来大きな負担となつていた小作料が、農地改革によつてなくなつたにもかかわらず何故拡大再生産してないだらうか。

それは米価が統制されており、工業生産物との間の価格差が大きいので、さきに示した第1図において、収入の増加にくらべて支出の増加が極めて大きくなる。その上、従来は考慮外であつた税金が加算されるので、結局においては残はやはりゼロになるからである。

つぎの表は、中農六〇〇〇戸を対象として行われた農林省の「農家経済調査」の統計であるが、これによると昭和廿五年度も昭和廿六年度も黒字になつてゐる。このことから單純に農民の生活が楽になつたとか、農地経営

が拡大再生産に移行したとみることは誤りである。昭和廿五年を例にとると、昭和廿四年から廿五年の間で、物価指数が二〇%上つてゐるにもかかわらず、生活費は五%しか増してゐない。つまりこれは農民が生活費をきりつめてゐることを意味してゐる。このことは統計的に嗜好品や肌膚の数量が減つてゐることからも理解される。従つて黒字になつたのは拡大再生産の結果ではなく、生活費のきりつめの結果によるものである。

昭和廿五、廿六年度において黒字になつた他の大きな理由は、農業外収入が増したことにある。従来の農業理論では農業外収入を余り問題にしてゐないが、この分析こそ日本の農業の特質を解く一つのカギである。

農業外収入はその大部分が俸給と賃金である。これは昭和九一〇年では全収入の一〇%を占めていたのが、

	農業収入	農業外収入	生産費	生活費	諸税公課	雑支出	残
昭和廿四年	九三、四九〇	四九、三四五	二八、五〇〇	八五、四〇四	二七、四七九	四、七二七	三、三七五 (赤字)
昭和廿五年	一〇三、五四三	五九、三八	三〇、六八	八九、四八四	三〇、六七七	五、一六〇	一六、九二
昭和廿六年	一二七、九七〇	七三、七七一	四三、九七	一〇八、〇二三	三二、六九二	六、〇〇三	三二、二七

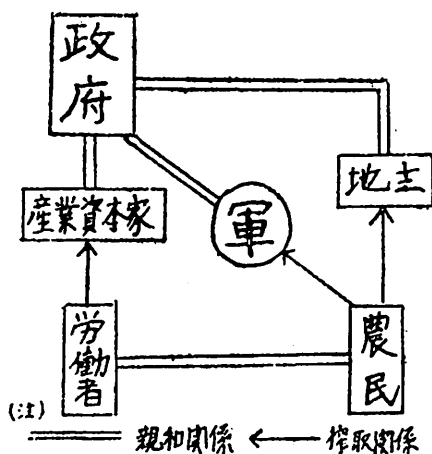
昭和廿四、廿六年度では全収入の三〇%、農地収入に対しては五〇%を占めるに至つた。そこでこの農業外収入を農家全収入からはずして考えるならば、昭和廿六年度でも大へんな赤字になる。

現在の農業経営において、農地改革の結果拡大再生産に移行した

ようにみえるのは、実は農業外収入によつて経営をカバーしているからである。

農業外収入が増したということを他の面から捉えたとそれが大部分賃金であるという点で、農民が余計に働いていることを意味している。つまり労働強化が行われているということである。

以上述べてきたことから、農地改革が行われても農民の生活が楽にはならないで、昔と変らない苦しい生活が続けられているということが理解されるであらう。従つて本当の農地改革が行われたのではないということになるわけである。



第 2 図

では何故農地改革が行われたのであろうか。それには日本の農業が明治初年以來おかれた状態をみる必要がある。第2図はそのカラクリを图示したものである。小作料が高ければ高い程農

民の生活が苦しくなるということは前に述べたがそうしておくことは單に地主の利益を擁護するだけでなく、低賃金の労働力を与えることになるから産業資本家をも喜ばせることにもなる。このことは明治廿年頃、日本の産業資本が勃興し始めたときに、農村から大量の紡績女工が進出したのを思い起せば明らかである。

農民の生活を苦しくしておけば国内市場が狭くなるのは当然で、そのはげぐちを求めて植民地の獲得が必要になる。植民地の獲得のためには侵略のための軍隊が必要で、その供給源がやはり農村であつた。これが明治以降の絶対主義天皇制の基礎になつてきたのである。

敗戦になつて、アメリカはこの基礎をなくすために日本から軍隊を除くことにきめた。これはアメリカの世界政策に基づくもので、当時アメリカは中国を自己の市場にしようとしていた。そのため侵略軍の競争者としての日本軍をなくす必要があつたわけである。そこで日本には多少ブルジョワ革命的なものを与えることになり、資本家に対しては財閥の解体を命じ、地主に対しては農地の解放を指令し、労働者には労働組合を、農民には協同組合を奨励するといった一貫した政策が実施されたのである。そしてこれらの仕上げとしてかの平和憲法が与えられたのである。

ところが昭和廿三年になつて、中国には中華人民共和國が樹立され、中国を自己の市場にしようとしたアメリカの意図が封じられるに至つた。アメリカが中国をねらたのは、自己の市場にするばかりではなく、それを軍事基地化してソ連に対する防衛拠点とすることも考えたからである。しかしその意図が封じられたので、一步日本に後退することになつた。そして以前中国で実施しようとしたアメリカの世界政策が、そのままの形で日本で行われようとしているのが現在の情勢である。

こうなつてくると、農民の生活を楽にするという考え方は後退し、米価・金融・税金の三つを牛耳つている政府が地主化してくるのは当然である。かくして農民全体が再び昔のような小作人に転落してしまつたのである。従つて日本民主化の第一歩として出発した農地改革は、前に述べた情勢の反映によつて骨抜きになつてしまつたわけである。

以上のように、日本の農民全体が小作人化したという観点から、現在彼らがおかれている状態をみれば、極めて明瞭に理解されるのであつて、そこで考えられる農民対策が、昭和七、八年の不況時代に考えられたものと同じになるのは当然なことである。そしてこのように小作人化した現在の農民が、反当り収入を増す努力をするの

も決して過去の小作人の考えた範囲外のことではない。

農民協同組合についても前に述べた情勢の反映によつて不振になるのは当然なことである。元来協同組合は社会主義的なもので、資本主義の上に与えられるものではない。従つて農民の生活を楽にしない立場に立つ現在においては、その存在が邪魔になるわけである。

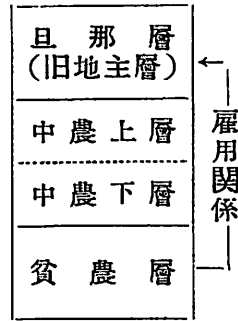
最近農業協同組合の再編成がやかましくいわれるのもそのためで、現状としては経済団体として一本化し金融資本に隷属させるか、昔の大日本農業会のように統一して行政の末端として利用するか、二つに一つの途しかない。

以上述べてきたことから理解されるように、日本の農業問題を正しく把握するためには、單に国内の關係だけをみてもどうにもならないのであつて、世界的視野において考えねばならないのである。

二、階層分化の問題

近頃やかましくいわれている階層分化の問題はどのように考えるべきであらうか。一・五町以上が富農で一・五町が中農で一町未満が貧農であるというような形式的な分け方では、本当の階層分化を理解することはできない。

私は日本の農村における階層分化を内容的に三つの段階に分けている。これを図示すると、第3図のようになる。



第 3 図

階層の一番上にくるのは且那層で、この中には旧地主だけでなく村長・村会議員・農協役員・教員など村の支配階級が含まれる。

一言でいうと村におけるインテリ階級である。

これらの人たちは農地を解放したので、農地の所有からいうと、形式的には大部分中農か貧農の階層に入れられる。たとえ三反か五反しかもつていなくても、自分で耕作するひまがないので、人を雇い入れて耕作させているのが普通である。

ではその雇人はどこからくるかというと、階層の一番下の貧農層からでてくるのである。

貧農層は経営面積が大へん少い（大体三〜五反）ので生活が苦しく労働力が余っている。そこで且那層の家に働きにでるわけである。従つて両階層の間に雇用関係が成立するのである。ここに一つの問題がでるのであるがそれについては後で述べることにする。

さて且那層のつぎに位置する中農層は、村の支配階級にはならない。何故ならこの階層は農業外収入に余り頼らない純自作で、経営面積が大きく相当の生産手段もつてゐる。従つて彼らは他のどの層の人たちよりも利己的であるからである。しかし、この中農層は農業の技術には熱心なので村における技術の中心となる。技術に関しては、且那層は中農層にくらべて劣つてゐる。

階級の一番下に位置する貧農層が村の支配階級になるということはまずないのであつて、彼らは村内の日雇、山林労働、土木工事、近所の工場の臨時工などにでることによつて賃金収入を得て生活している。

そこで問題になるのは且那と日雇との関係である。このばあい且那はそう広い農地をもつてゐるのではないから、一人の且那に二人以上の日雇がつくということはなく、ある特定の且那にある特定の日雇がつくという関係になるわけである。この一対一の関係が封建的な基礎になるということはないことである。

従つて且那がある特定の政党を支持するばあいは、その日雇もその政党を支持せざるを得ないのであつて、もしそうしなければ彼らの生活をおびやかされることになる。農村の貧農層が現在保守政党を支持するのは無理もないので、そうした封建的な権力関係によつて強制され

た結果である。

中農層は更に上層と下層とに分れ、上層と下層とで條件が違っている。例を二、三男問題にとるならば、中農上層は相当の経営面積をもっているもので、その二、三男は多少の不安もあるけれども、一つの経営の中で長男と共に働こうという考えをもっている。従つて彼らは農業の技術に熱心である。

これに反して、中農下層では長男だけは何とかやつていけるが、二、三男はどうにもならない。そうかといつて彼らを上級学校に進学させてやることもできない。従つて彼らは貧農層に転落することは目に見えている。こういう状態におかれた中農下層の二、三男がニヒリストイックになり、いわゆるアロハ族になるのは当然なことで農業の技術に熱心にならないことはいうまでもない。ではその下の貧農層の二、三男はどうかというところ、これは始めから問題にならない。彼らは義務教育をおえれば直ちに収穫にゆくか、工場の臨時工などにでる。そうしなければその日から生きていけないのである。

近頃農家の二、三男問題が強く叫ばれているけれどもそれを一つの問題と考えることは正当でない。以上述べてきたことから理解されるように、この問題は内容的には異質的な多くの問題を含んでいるのである。従つて農

村の階層分化を形式的に分けることは、その内容を理解しないばかりではなく、実体を把握しないことにもなる。こう考えてくると、階層分化の問題はそう簡単なものではなく、村々によつて條件が異なるということが理解されるであらう。

東北地方では最近日雇がなくて威張つているといわれるが、東北地方の單作地帯では三〇五反の経営面積ではやつていけないので、これらの貧農層は、没落してしまふ。そして村外の出稼ぎにでるので、村によつては日雇の供給源であつた貧農層が全然なくなつてしまふばあいがある。そのとき日雇は近所の他村から入つてくるという形になる。従つてこの人たちが多少鼻息が荒いのは当然考えられることである。

農村には必ず富農・中農・貧農の三つの階層があるという形式的な分け方では、以上のことがらは理解されないであつて、貧農階層が欠けるということは條件が良いから起るのではなくて、むしろ大へん悪い條件の下に起る現象である。この情勢がさらに悪化するとこれらの人たちは働き処がなくなつて再び村に戻り、そこで完全な農村プロレタリアートを形成するに至る。貧農階層を欠いているのはその前の過程にあるからである。

このように考えると、階層分化の問題はかなり複雑な

問題で、それはあくまで内容的に分けられるべきで、決して形式的に分けられるべきではない。

三、生産教育の盲点

私はこゝで生産教育を熱心に実践している兵庫県朝来郡のある中学校の報告に基いて、現在の生産教育の盲点を指摘することにする。

この学校では草花の栽培とウサギの飼育から出発し、これらの仕事と関連させて理科教育を行い、それがしだいに発展して、近所の山を解放してもらつて植林をやるようになり、また近所からミシンを払下げてもらつて縫物の下請をやるようになった。そして実際に利益を得てその金で修学旅行にゆくこともできた。さらに條件が整つたので製縫機を購入し、縫を作つて利益を得ている。同様に楽やきも始められた。そして最後に学校が到達した結論は学校として協同組合を作らねばならないということであつた。それから学校の中に大きな規模の多くの部門をもつた生活協同組合ができ、これにともなつて信用組合的な機関や学校金庫のようなものまでできて、現在では大へん優れた経営をやつていているという。

そこで私が疑問をもつたことが幾つかある。例えば草花の栽培について、この仕事は情操教育にもなり生徒たちは大へん熱心に働き労働を楽しんでいるというが、学校の草花と実際の花作り経営との対比が全然行われていない。私はこの点が大へん問題になると思うのである。

ウサギの飼育においても、ウサギを育てて利益をあげたということよりも実際の経営では、現在ウサギの飼育は儲からないのは何故だろうかという追求の方が大切なのではないだろうか。学校でそれが儲かるようにみえるのは、実は生徒の労働力をタダにみているからであつて経営的にみれば儲かるはずがないのである。

楽やきについても、楽やきをやるそのことは大へんよいことだと思いが、そのばあい花びんと湯のみではどちらが儲かるのか、また階層的にみたばあい花びんはどの階層によく売れるのかということまで究明するのでなければ、單に楽やきの技術を習得するだけに終つてしまふのではないだろうか。

また製縫機のばあいも、それを操作することによつて技術的にカンとかコツを習得できるし、機械のメカニズムを理解したりできるので大へんよいことだと思ふ。日本の農業用機械は性能が悪く、うまくやらないとすぐ引つかつたり、こわれたりする。そこをうまくやることがコツなのである。そのばあい何故そういうコツを必要としない誰でも操作できる機械ができないだろうか、何故ワラという大へん不揃な材料をいつまでも日本の農民が使わねばならないのだろうかという追求が忘れられてはならないと思う。とくにミシンの下請仕事のばあい、学校で安くやることによつて村の未亡人たちの生活を圧迫するようになつたら大へん問題である。

以上は一つの例にすぎないが、学校で仕事を熱心にや

つていればやつていられるだけ、そこに根本的な問題がでてくるのである。それは何かといえば、学校の生産教育が学校の中だけの視野に止まつているということ、これでは現在の生産教育は行きづまるのではないかと思う。

さきの例で、学校でワラ細工をやるようになったら、生徒が一本のワラをも大切にしようという立派な態度を身につけるようになったといっているが、もしその生徒が作男になつていつたばあい、そこで学校におけると同じように一本のワラをも大切にしようということになつたらこの生徒は大へん悲劇的な状態に追込まれることになる。何故学校では一本のワラをも大切にしようかといえば、それは自分で働いて得た利益は、そのまま自分の利益になるからである。ところが作男のばあいは、自分で働いて得た利益は自分の利益にはならないのである。こういう権力の関係、つまり誰のために誰が働いて誰の利益になるかというのを、一本生産教育の中に入れておかなければ、單なる技術の教育だけに終つてしまい、そこで問題が起るのは当然だといわなければならない。

この点をはつきりさせた上で、しかも技術的にはどんな高いものを取り上げるべきである。学校では税金も労賃もかからないのであるから、こういうところでこそどんな人にも操作できるような優れた機械を考案すべきである。

現実の経営がそうなっていないから高い技術の教育は

無用だというのではなく、現実と教育の間にどんな相異があるかということ、生産教育を通じて学習させていつたときに、生産教育の正しさがでてくるのではないだろうか。現実と教育の間を切り離すと、現在問題になつているように、技術は権力のために奉仕するという形になる。もちろん技術は権力のために奉仕する面もあるけれども、それだからといって技術を知らないということが正しいのではなくて、その技術を將來の自分の力にすることが大切である。

生徒が学校を卒えて経営の中に入つたら、まずその職場でなくてはならない人間になることが大切である。けれどもそれと同時に、それに矛盾を感じない人間であつてはならない。その矛盾を現実の生産を通じて身につけておくべきで、それは生産教育を通じてなされるべきである。これを單に資本主義の社会はこうで、社会主義の社会はこうだということだけを教えるだけでは、どうにもならないのであつて、現実一本のワラを大切にするかしないかという問題から、そういう緒口をみつけたしてゆくべきである。私はこの点にこそ生産教育の主要性があるのではないかと考える。(九月廿日研究会における講演要旨、文責在記者)

参考文献

大内 力著 日本資本主義の農業問題(改訂版)

福本和夫著 日本農村の階級区分(理論社発行)

雑誌教育「生産のための教育特集」(十一月号)

栽培に関する

学習指導案の基底

提 案 中 村 邦 男

一、栽培に関する学習内容の基礎

職業家庭科の学習が「実生活に役立つしごと」を中心として行われるものであつて、一定の仕事の職業訓練でない事は、この教科の性格や目標から考えて自明のことである。この「実生活に役立つしごと」をどのように規定するかが最も根本的な問題であらう。私はつぎのように考えている。

(1) 生徒の日常生活の中にあるしごとで、生徒の発達段階に応じしかも生産技術と連りのあるしごと（生産技術）

(2) 現在及び将来の生産に役立つ基礎的な技術を含むしごと（生産技術）

(3) 生徒の啓発的経験としても役立つようなしごと

このような基準によつて、最も適当なしごとを選ぶのであるが、それが教師の主観によるのではなく、まづしごとの要素作業を分析し、基礎的な要素作業をふくむしごとを選び出し、更に地域社会の要求（地域社会の課題解決）生徒の経験や必要を調査した資料によつて、取捨選択する。また現代産業の基礎的な技術という点から再吟味されて学習すべきしごとが決定されなくてはならない。このような考え方で、栽培に関する仕事を選ぶ場合、

問題となる事は「栽培のしごとのオペレーションをどのようにして行ひか」ということと「現代及び将来のわが国の農業をどのようにに把握するか」ということである。

まづ栽培のしごとの分析であるが、わが国の農業生産は未分化の状態で、総合技術的なものが多いので、要素作業の分析は容易でない。結局、現状においては、総合的（共通する）要素によつて分析し、基礎的な共通する要素の多いしごとを選ぶ方法による以外にならう。

わが国の農業の現状や動向については、大きな問題で容易に見極める事は出来ないであらうが、多くの農政学者の諸説を参考とし、農村問題の解決として一応

(1) 農村の封建性の打破（農民の民主化）
(2) 農業経営の合理化（経営技術の改善）

(3) 栽培技術の科学化（伝承的技術への批判、栽培の科学化、機械化と電化）

と考えて農業の課題を捉え、この課題解決に役立つような技能を習得できるしごとを選ぶ必要がある。

以下、仕事・技術に関する知識・社会的経済的知識にわけて「どのようなものを選んだらよいか」を具体的に述べてみよう。

二、仕事の選択について

栽培のしごとを作物の性質・栽培技術の類型により

(a) 作物（いね、麦、その他の穀類）

(b) 野菜（果菜類、葉菜類、根菜類、水田裏作野菜、

軟化栽培の野菜等に分ける）

(c) 果樹

(d) 草花類（一二年草、宿根草、球根類、花木類）

(e) 特殊作物（緑肥作物、工芸作物）

に類別し、なるべく各類より代表的なしごとを選び、その類に共通する技能を習得できるようにする。

つぎに栽培の技能をなるべく細かく分析し、分析された要素作業を

(a) 極めて基礎的な技能の習得に必要な要素作業（基

礎要素作業——如何る作物の栽培にも必要なもの）

(b) 少々専門的な技能の習得に必要な要素作業（稍、高度でしかも普扇性のある生産技術の要素作業）

(c) 農業生産の改良に役立つ技能の習得に必要な要素作業

の三つに類別し、要素作業の類別毎に要素作業が比較的多くふくまれているしごとを、仕事の各類より一〜二つを選び出した。（要素の作業分析表省略）

要素作業を基礎として選ばれたしごとが「生徒の日常生活とどのような関係を持つか」「生徒の生活経験からの距離はどうか」「地域社会の課題解決との関係はどうか」更に「わが国の現在及び将来の農業生産と有機的な関係を持つかどうか」等の諸点より更に選択して、学習内容となるべきしごとを次表のように決定した。

技能の類別	仕事の類別
(A) 一般的（基礎）技能 打ち起し、作條、播種、間引、中打ち、施肥（堆肥の作り込み含む）、土壌病害防除、輪作	(A) 一般（基礎）的な仕事 作物…こむぎ、じゃがいも、さつまいも 野菜…果菜類（植付から）かぼちや、トマト、なす 葉菜類、山東菜、ほうれんそう、こまつな、体菜 根菜類、かぶ三寸（五寸）にんじん、二年子大根 草花類（露地）、一二年草 宿根草、球根

(B) 稍々専門化した技術 能(一般技能)のほかに、 管理、軟化技術、 果樹剪定、整枝、 接木、挿木、選種、 代木、田植、灌漑、 水田除草	(B) 稍々専門化した仕事 作物：水稲、陸稻、さつまいも、 野菜：果菜類(育苗から)、 トマト、なす、きゅうり、かぼちや 葉菜類：結球白菜、たまな、 根菜類：大長にんじん、秋大根、 果樹(手入)：かき、くり 草花類(鉢植)：一二年草、宿根草、球根草
(C) 特産的作物栽培の技術 特殊な技術(工芸作物等の栽培技術)	(C) 特産的作物の栽培 作物：緑肥作物(クロバー、青刈大豆)、 工芸作物(あさ、ちや、わた、くわ) 野菜：特産的な野菜(地方によつて異なる) 果樹：もも、りんご、ぶどう みかん、等 草花：花木の育苗等

これらのしことをどのように配列するかは、生徒の発達段階・生徒の経験地域社会の要求度・栽培時期と期間等、地域によつて、いろいろな配列が考えられるであらう。

三、技術に関する知識理解の選び方

技術に関する知識理解は、しごとと結びついて学習されなければならないことはいうまでもない。しかし、このことは必ずしも、しごとをなすことによつて、必然的に習得されるもののみとは限らない。しごとを行ふ前に予め習得されなければならないものもふくんでいる。即ち技術に関する知識には、しごとをするための予備知識を与え、それを使つてしごとをすることによつて身につく知識と、しごとを行ふ過程において必然的に要求され、生徒自身が研究しつゝ獲得する知識とがある。この技術に関する知識は、しごとと要素作業の分析によつて、必然的に把握することが出来よう。このようにして抽出された技術的知識は、当然しごとと結びついたものとなるであらう。

技術に関する知識の具体的項目は、紙数の関係で省略するが、その主なるものを挙げればつぎのようになる。(括弧内に連関した仕事)

A 土壌管理に関するもの

- (1) 土壌の性質と作物の成育(打ち起し・作付)
- (2) 土壌により伝染する病氣(土壌消毒)
- (3) 土壌と害虫の関係 ()
- (4) 土壌の種類と作物の栽培(作付、輪作)
- (5) 土壌の性質と肥料(施肥計画・堆肥作り)

B 栽培管理に関するもの

- (6) 土壌の化学的性質(作付・酸性土壌の中和)
- (1) 作物の特性と栽培法(作付計画・栽培計画)
- (2) 良苗の條件(良苗、移植、定植)
- (8) 発芽の條件(播種)
- (4) 良い種の條件(選種、播種)
- (5) 一代雜種の利用(栽培計画)
- (6) フォトペリオダイズムとヴァーナリゼーション
(作付、促成栽培等)
- (7) 種子の予措の意義(播種)
- (8) 移植と根の発達(移植)
- (9) 肥料の種類と肥効(施肥)
- (10) 栽培距離と作物の生育(播種、植付、間引)
- (11) 栄養週期の問題(施肥)
- (12) 適時適作業の必要(除草、植付、間引、施肥)
- (13) 病虫害防除藥の種類とその使用法(病虫害防除)
- (14) 害虫の種類と生態(害虫駆除)
- (15) 作物の病気の伝染経路(病害予防)
- (16) 主なる病気とその病後()
- (17) 細苗繁殖の條件(病害予防)
- (18) 害虫と口器と駆除藥劑の關係(害虫駆除)
- (19) 害虫繁殖の條件(害虫駆除)

C 經營管理に関するもの

- (20) 踏込み材料と溫床溫度(育苗)
- (21) 結果の習性(剪定、整枝、摘芽)
- (22) 摘果と必要(摘果)
- (1) 適地適作の必要(作付計画)
- (2) 農業の立地條件()
- (3) 輪作の必要()
- (4) 土地利用の高度化(作付計画)
- (5) 労力の節約と配分(全般、作付計画)
- (6) 時間の節約と配分()

四、社会的経済的知識の選び方

指導要領に示された十項目の知識を更に分析し、栽培のしごととの連関において学習できるものを選ぶと共に農村の現状を改善するのに役立つ知識を選ぶ。

五、態度について

態度が身につくためには、それが与えられた徳目の理解に終つてしまうのではなく、その理解が自然の行為となつて現われるものでなければならない。即ちその理解が他から与えられるものでなく、生徒自身の体験をとうして獲得されるものでなければならない。例えば、勤労を尊ぶ態度は、生徒が勤労の尊さをその結果として自覚

し得るようなしごとを通じて養われるのであつて、單に勞力奉仕的なしごとをさせられたのでは、決して勤勞を尊ぶ態度などは養われないであらう。

このように、態度の育成はどこまでも仕事を通じて、望ましい習慣として養われるのであつて、予め一定の徳目を掲げて指導されるものではないであらう。

六、指導上の留意点

以上のような基準によつて、學習内容をきめて學習を展開する場合、指導上注意すべき点を挙げれば

- (1) 生徒に習得さすべき技能を十分把握して指導する
プロジェクト學習を行う場合、往々にして「物を作る」ことにのみ主力が注がれ、その仕事に含まれている要素作業の指導が忘れられ勝であるから、この点は、しつかりと把握して指導しなければならぬ
- (2) 正しい道具を正しく用いるように指導する

間に合せの道具でしごとをすることは決して望ましいことではない。正しい道具を正しく用いることは、科学的に能率的にしごとを行う基礎である。この基礎を無視しては、科学的な技能の習得はでき得ないであらう。

(3) 栽培時期を失わぬように指導する

栽培のしごとにおいては適時に適作業を行うことが極めて大切である。殊に播種期を失せぬように予

め充分な計画をたてて指導しなければならない。

(4) 勤勞主義にならぬように指導する

栽培のしごとは、相当勞力の必要なものであるため「黙々として働け」というような觀念が強く要求される場合が多いが、このような指導は絶対に避くべきであつて「如何にして少ない勞力で、よりよい結果が得られるか」という合理的な勤勞に重点を置いて指導すべきである。所謂「楽しい作業」がなされなければならない。

(5) 勤勞奉仕主義にならぬように指導する

生産教育の立場から「生産する教育」の形態を作り、生徒の勞力奉仕によつて、学校に必要な物品を作つたり、資金の獲得を図つたりするような指導は避けなければならない。

このような教育は、かつての勤勞奉仕教育でありそれが極端になると、生徒の勞力提供のみを要求し技能の習得が殆んど忘れられるような精神主義的教育になつてしまふ。仕事の學習はあくまで科学主義・合理主義に立脚し、學習の主体は生徒にある事を忘れてはならぬ。

生産教育といつても、中学校においては、広い分野における生産の基礎技術の習得と、主要なる生産に対する理解を目標とすべきであつて、一定の生産にのみ重点を置いた教育であつてはならないであらう。(東京都砧中学校教諭)

中村氏の提案をめぐって

(提案者)

中村 邦夫 (東京都世田谷区砧中学校)

上田 亥之八 (福井県教育研究所)

根岸 正明 (群馬県邑楽郡西谷田中学校)

信 田 栄 (鳥取県東伯郡東伯中学校)

渡 辺 俊雄 (東京都北多摩郡国分寺中学校)

清 原 道寿 (国学院大学助教授)

鈴 木 寿雄 (職業教育研究会理事)

(司 会)

池 田 種生 (職業教育研究会常任理事)

は し が き

前掲の中村氏の提案は、日々の実践が結晶した貴重なもので、読者はそこから多くの示唆を与えられるにちがいない。それだけにこの提案の不明な点や問題のある所を解明することは、一層その内容を研き上げることに必要かと思ひ、研究会に出席

された方に討議してもらふことにした。その要点を座談会の形式で発表するわけであるが、元より栽培の問題は、簡単に解決されない多くの問題がふくまれているので、単なる討議だけで終るものではない。お互の地道な実践を通して、漸次的に新しい開拓がなされていくべきであらう

(編集部)

池田 中村先生は、文部省学習指導要領の委員でもあり、熱心なこの教科の実践と研究を積んで来られた方です。以上発表されたものは、その集積をまとめられたもので、非常に貴重なものと思います。

これを会誌に掲載させて頂くに当つて、恰度よい機会ですから、この案に対して、皆さんから質問や意見をききたいと思うわけです。

渡辺 作物を選ぶばあい、果菜類・葉菜類・根菜類の各々からそれぞれ適當なもの一、二選ぶというのですが、このように各々に亘つてやることは、現在の職業家庭科の時間配当や施設などの点から考えると相當に無理なように思えるのです。どれか一つの類に重点をおいて、しかも栽培の技術のミニマム・エッセンシャルズをおさえてゆくことができないものでしょうか。

中村 作物が多いようですが、各

類には共通的な技術と共に、それぞれの類でとくに重点をおいて指導しなくてはならない技術がある。しかも果菜類は夏作ですし、葉菜類は秋作ですから、栽培期間を考えると実施可能だと思います。施設については、私の学校では一クラスを四グループに分け、各グループに三坪ぐらいの畠を与えています。

上田 園芸関係の仕事を第一類の中でどう位置づけるかについて考慮すべきではないでしょうか。

中村 たしかに飼育や食品加工との関係を考えるべきだと思います。ただここでは園芸に限って立案したのです。

上田 栽培の技術を、基礎的な技術の段階（第一段階）、やや専門化した技術の段階（第二段階）、特産的な技術の段階（第三段階）と類別しているが、第二、第三の段階にも共通的に第一段階が含まれるのですから

こういう区別をせずに問題のある作物だけについて少数選ぶべきではないでしょうか。

中村 各々のどれか一つを選ぶべきで、どれもやるという意味ではないのです。一つだけここに例示すると、どここの地域でもこれというように限定して考えられやすいので例示の数を多くしたまでです。

信田 一つの作物を満足に作ることでできれば、他の作物についても同様にできると思います。

上田 そういう意味で、余り問題のない、例えばカブのようなものはやらないで、問題の多いものに重点をおいて、やつている間に何か一つ有意義なものを掴む作物に限定したらと思うのです。

中村 問題の多い作物といつても都市の生徒のように園芸については全く経験のないばあいには、少し難点があると思います。これらの生徒

には、失敗しないようなものから始めることが、必要ではないでしょうか。

渡辺 立案の立場がやや農業技術学の体系に傾きすぎているように思える。各類がそれぞれ特殊な技術を要求することは当然ですが、より広い立場からみればその間に共通性が考えられるから、どこかに重点をおくべきではないでしょうか。

中村 たしかに技術学の体系に偏しているかも知れない。ただ私としては、各類の特質を少しずつ掴ませたいと考えたのです。少し慾張った考えかも知れませんが。

池田 第一類以外の仕事も取り上げねばならないことを考えると、他の仕事の時間が足りなくなるようですね。この問題はこれ位にして、他の点はどうですか。

根岸 十二人前後の一グループが三坪の畠を経営するといったような

大へん小さな所で薬剤散布などを取り上げたばあい、ママゴトになりはしないでしょうか。

中村 以前は大きく区切つてやらせたのですが、どうもこのやり方は勤労主義になりやすいので、面積は大へん狭いが生徒が、自分たちの畠だという明確な自覚の下に自主的に経営してゆくという形を採つたわけです。できれば一グループに一畝ぐらい欲しいのですがね。

上田 昔は農村から青年がでてゆくことは喜ばれなかつたが、今ではその反対に、少しでていつてもらいたいという状態です。こういう状態の下で、親たちが職業家庭科に要求するものをそのまま受け入れてよいかどうか。また、農村の生徒はやらせればよい仕事をするけれども、農業の仕事には興味をもつていない。以上の二つの点から考えて、この案は都市の近傍には大へん結構なもの

だと思いますが、農村では少し困るのではないかと心配するのですが、どうでしょうか。

中村 ではどういう内容をもたせたらよいでしょうか。

信田 農村の人たちは科学的な知識が全くないといつてよい。例えば西瓜を作るにはどんな肥料がよいかということただ一つを聞いて満足している状態です。そこで肥料の三要素とは何かといったような科学的な知識の指導から始めるべきだと思います。

上田 肥料とか病虫害防止とか機械操作とか農産物加工などの面に重点をおくべきだと思います。

池田 栽培の仕事を取り上げるばあい、その技術が今迄に家でやつていることの繰返しにすぎないということになると、農村では問題ですねもつと農村の生徒に興味をもたせ得るような面が考えられないものでし

ようか。

根岸 農業の仕事は大きく二つに分けられると思います。つまり、従来の慣習的な仕事をそのまま近代的なワクの中に入れていつて、実際の栽培をやらせる方法と理論的な試験的な栽培をやらせる方法とがあります。後者の方法を探れば、農村の生徒は相当に興味をもつてやるのではないでしようか。この提案は前者の方法に立脚して立案しておりますが、後者の方法に立脚すれば別のプランで考えられると思います。私の経験を述べますと、選択コースに肥料分析・農産加工・酸土検定の三つを計画したら、生徒が多数参加しました。前年までは普通の栽培コースを置いたのですが、うっかりこんなコースを選択すると、作業をやらされるからいやだといつて生徒が集まりませんでした。

信田 家で相当に働かされた上に

また学校でも同じことをやらされるのでは、生徒はたまらないですからね。

上田 仕事をして収穫した作物はどのように処理されるのですか。

中村 生徒に自主的に処分させております。イモなどは学校で皆でゆでて食べているようです。

上田 皆で食べようというのはいい心情ですね。

中村 昔は生徒が一生懸命作ったものを取り上げて、先生の間で分けたりなどしましたね。(笑声)

清原 それが現在の資本主義社会の現実ですよ。(笑声)それだからこそ、インフオーメーション(社会経済的知識)を技術と結びつけて指導しなくてはならないのです。

鈴木 栽培の技術を三つの段階に類別した立案の立場そのものに私は少し異なつた、意見をもつております。それは職業家庭科の基本的性格

をどのように捉えるかによつて異なつてくるものと思いますが、私はそれを「技術を通じての産業理解」という観点から、規定したいと考えます。したがつて専門人の育成を目的とする職業教育の観点を全く捨てております。職業教育の観点からすれば、当然ここに挙げられたような第二、第三の段階が用意されるべきでしよが、産業理解の観点からすれば、農村の生徒だからとか農業に進む生徒だからといつて、第二、第三の段階を学習しなければならないという根拠を、見出すことができません。もちろん、都市と農村とでは、技術的に一方は全く経験がないし、他方は家で相当に経験しているのだから、内容的には当然異なつたものになると思いますが、ともかく基本的な通有的な技術の段階を用意するだけでよいのではないでしよか。

中村 第二、第三の段階は選択コ

ースとして考えてよいのです。

清原 産業理解の観点からみたばあい、取り上げる作物は技術の分析から選ばれるべきではなく、仕事から選ばれるべきでは、ないでしょうか。つまり、技術を通じて産業を理解させるためには、どんな栽培のことに重点をおいたらよいかということとを現代の農業の動向から明かにした上で、栽培技術を分析し、なるべく多くのオペレーションを含む代表的な作物を選択するというような手続きによるのです。こうすれば、選ばれた作物が産業理解に通じるものになるわけです。技術学は古いものから、新しいものまですべてを含みますからこれを分析して作物を選んでも、産業理解に通じるかは疑問です。

池田 たしかに工業のばあいと違って、現在のような封建時代からの伝統農業の現状における技術を分析

してみても、農業改善の方途はでてこないようですね。

鈴木 現在の栽培技術を科学化してゆくという限りにおいては、この提案の立場は正しい方向をもつていと思うのです。機械化とか電化といつたところで、現在の学校の現状では実行できないのですから。そこで一歩進めて、日本の農業の動向から各類にウェイトをつけるという考え方がでてくるわけです。

清原 そうすれば技術を通じての産業理解という観点が生きてくるのです。そうでないと、学校でやつていいる仕事は現代産業から遊離してしまいう危険性があります。

中村 日本の農業の動向を見究めるといふことは重要なことだと思いますが、大へんむずかしい問題ですね。

鈴木 学校における生産と社会における生産とを遊離させないために

は、インフォメーション（社会経済的知識）を軽視してはならないと思います。学習指導要領では、この点は大へん安直に考えられておりますが、この知識との結びつきが考慮されなければ単なる技術の習得に終つてしまいます。このような観点からこの提案をみますと問題が一つ残されているように思えます。日本の農業のあり方を考えますと、とくに社会経済的知識の指導は、もつと強調されてよいと思います。

池田 ではこのへんで……。



ブックレビュー

岩波講座 教育 (全八卷)

現在までに第三卷が配本されている。第一卷「世界と日本」、第二卷「日本の問題」、第三卷「日本の教育」がそれである。

終戦後のわが国教育の歩んだ道、それを省み掘り下げて、今後の教育の在り方をじっくり考えて見なくてはならない今日、この講座は、教育書として近來にない充実した内容を持つてゐる。執筆者は、従来の教育専門家のみならず、広く経済界、言論界などの權威ある進歩的な人々によつて書かれてゐる。現代教育の実際はぜひ一読を要する。隅から隅まで読んでほしい書である。

第一卷で注目されるのは清水幾太郎氏の「現代文明論」都留重人氏の

「戦後世界の情勢」など。第二卷では、大内兵衛氏の「太平洋戦争の意義」は有益である。第三卷では、笠信太郎氏をはじめ、日高六郎、久野收、依田新など教育学者のものが注目され、殊に宮原誠一氏の「産業と教育」は、会員各位にぜひ読んでもらいたいと思う。(各二五〇円、東京都千代田区一ツ橋岩波書店)

海後宗臣監修

中学校職業家庭科の解説

この本は多くの問題をふくんでいる。昭和二十六年の文部省学習指導要領によるとつてあるように、それに基いて、著者が解釈を下し、それに合致させようとしている。そこに無理や矛盾が到る処に続出して、却つて職業家庭科の根本的理解を歪曲するような面さえ見えるのである。

あの指導要領は、決して完全なもの

のではなく、文部省でもその批判を広く求めているし、すでに根本的に改正される案が文部省で作られつつある際である。無批判にこれを取り入れ、生活技術学習というような誤つた考えでこじつけようとすることは、学問的に正しくない。

併し監修者の海後氏は、あの指導要領作成の時の委員長であり、氏の教育理論がそこに出ている。あの指導要領についての考え方を知るには好都合であり、今後生れようとする根本理念(本研究会で打出している)を理解する上に、比較すると役立ち得る書である。(価二〇〇円、東京都千代田区淡路町、中央産業教育協会)



海外紹介

アメリカ・ロスアンジェルス市の

小学校における工作教育

職業教育研究会編集部

まえがき

アメリカ・カリフォルニア州・ロスアンジェルス市学校教育局の職業教育関係の指導部長であるニハート氏 (Claude E. Nihart) がスクー
ル・ボード・ジャーナル誌九月号 (the American School Board Journal, Sep., 1952) に『小学校におけるインダストリアル・アーツ』という表題の論文を寄せている。われわれが職業家庭科の教育計画を立案するばあい、アメリカにおけるインダストリアル・アーツ (工作) の本質を理解することは有意義なこと

であると思われるので、ここにその要旨を紹介する。

ただし、この紹介を読まれるばあい、ここで述べられているインダストリアル・アーツは、小学校の段階のものであること、および独立の教科としてのそれではなく、社会科や科学などのアカデミックな教科を具体的に学習する——ラーニング・バイ・ドゥイング (なすことによつて学ぶ) ——方法として考えられていることの二点は、注意されるべきでわが国の職業科におけるそれとは自ら別である。

それにしても、小学校でこれだけ

の工作学習が行われていることは、改めてわが国の中学校の教科課程を見なおす資料となり得るであろう。

× × ×

古くなつた手工科教育

工具や材料を使用して学習する手作業は、小学校にあつてはそう新しいものではなく、アメリカにおける多くの地域社会においては、五〇年以上の歴史をもっている、しかし最近では、その組織と目的とは全く変化してしまつた。

以前は、小学校に作業台と工具を設備した特別の手工教室があり、作業は一人の専門教師によつて指導され、学習時間も作業室における実習のために毎週独立に設けられた。そのコースは、わずかばかりの工具を使い大へん簡単な製品から始め、次第に新しい工具と技能とを加えることによつて、作業が困難さを増して

いくように構成されていた。

このような手工科のプログラムは手の全般的な器用さの開発、整頓と正確さの習慣の訓練、教室に静坐していることから来る肉体的な悪影響の防止、肉体的な労働に対する尊敬の啓発などのような目的で提唱されたのであるが、現在では、多くの地域社会においては廃止されてしまった。

それは一つには小学校のカリキュラムが変ったこと、二つには多くの手工科教員の雇用の必要を加えたこと、三つには下級中学校が発達したこと、四つには現代の教育哲学にびつたりしなくなつたことの原因によるものである。

現代における工作

プログラム

現代の小学校における典型的な工作プログラムは、以前のような独立

の教科としての手工科とはかなり違つてゐる。

つまり、責任を負わされた一人の専門教師によつて、完備した作業室において営まれてきたのに代つて、正規の担任教師の指導の下で、簡単な設備をもつた教室で営まれる。現代の小学校においては、子供たちは学級における一定の仕事の必要から生れる多くの製品を組み立てようとする。また子供たちは、友人や両親への季節的な贈物を作つたり、仕事や遊びのための設備を用意したり、製作活動において、他の子供たちを助けたりすることを望んでいる。

下級学年における工作

工作プログラムは第一、二、三学年において最も急速に発達した。これら下級の学年においては、手作業は密接に社会科に関係づけられていて、学級の仕事は多くのばあい一つ

のテーマに集まつてゐる。例えば、下級学年におけるこのテーマは、家庭とか学校とか地域社会とかである。幼い子供たちは抽象的に学ぶことをしないから、地域社会の中にある事物について学ぶときには、その学習に現実性を与える何物かを必要とする。工作プログラムはその必要に寄与するのである。

(設備) 学校は組立作業の必要が起きたばあいに、室から室へ運べる移動式の工具箱を設備している。各工具箱にはつぎの工具を備えている
小型ノコギリ・金ヅチ・ヤスリ・曲柄ギリ・ネジギリ・ハンドドリル・物指・三角定規・シヤコ万力
(組立作業) 子供たちは地域社会について学ぶばあい、いろいろな概念を明かにするために、模型のトラック、ボート、汽車、航空機、給油所、車庫、さらに学級の一定の仕事に属した製品を作る。このばあい学

級で計画される組立作業の総量は教師の思慮に任される。

上級学年における工作

多くの学校の組織において、第四五、六年の上級学年における工作プログラムは遅々たる進歩しかしていない。これは作業を進めるための適当な設備を整えることが困難なことから、担任教師が手作業に対する熟練を欠いていることによるのかも知れない。作業に必要な設備については、上級学年においては一つの問題を提起している。

(設備) 教室は作業台のまわりで作業するのに十分なだけの広さをもたねばならない。ロスアンジェルスでは試作的な作業台は、上級学年の教室における工作のための広さに対して適当に考慮されている。各作業台は、上げたり下げたりできる両面使用の工具掛板を備えており、補充

のための材料や工具類を保管する戸棚をもっている。また、使用しないときには取りはずせる四つの小万力が台の隅にしめつけてある。作業台は、高さ三〇インチ、長さ六〇インチ、巾三六インチで、四人から六人の生徒を收容する。たゞ一つの作業台しか設備されないで、全ての生徒が同時に組立作業をやることはできない。

別に計画された作業台は、その下に保管用の戸棚をもち、後側に工具掛板を備えた木工用の作業台である。これは手頃な値段であるので、大きな試作的な作業台よりも広く一般に使用されている。

上級学年の教室における設備はつぎの通りである。

木工用作業台(一)ノコヒキ台(二)木工用万力(二) 留木木口台(一) 上級学年で使用する工具はつぎの通りである。

ノコギリ(二) 金切りノコ(一) 金ヅチ(二) 三角定規(二) シヤコ万力(二) カンナ(二) ハンドドリル(一) 各種直柄ギリ $\frac{3}{8}$ ・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{3}{4}$ ・ $1\frac{1}{2}$ インチ(一) 曲柄ギリ(一) 木ネジセット $\frac{1}{8}$ ・ $\frac{3}{8}$ ・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{3}{4}$ ・ 1 インチ(一) 糸ノコ(二) 突ギリ(一) 荒削ヤスリ(一) 半丸ヤスリ(一) 先細丸ヤスリ(一) 丸ヤスリ(一) ヤスリ柄(四) ヤスリバケ(一) 釘セット(一) ポンチ(一) 食切り(一) ネジマワシ(一) 金切りバサミ(一) ケガキ針(一) 物指(二) 小刀(一) 廻引キノコ(一)

【注】(一)内は数量。

教育計画

教育計画は、生徒の興味と教師の能力によつて差異がある。上級学年の学級においては、生徒は、社会科学や科学やその他のアカデミックな教科から発展した組立作業に加えて、

季節的なプロジェクトや個人の興味によるプロジェクトを計画し実行することが許される。

(季節的なプロジェクト) クリスマスの頃、われわれの学校では、少年や少女たちが両親への贈物を作ることが習慣になつてゐる。これらの贈物がかつても実際に使えるものであり、子供としての最善の努力を表わしているならば大いに感謝される。よく計画されたプロジェクトは立派な贈物を生み、材料と工具の使用に際しては教育的に確実な経験を与えるものである。

季節的なプロジェクトは少年だけに限定されるべきではない。少女もまた、適当な動機があるならば、工具や材料を使用して喜んで作業する季節的なプロジェクトのために、ほとと一週間に一時間の割で六、八週間の学習時間がそれぞれの子供に与えられるべきである。

(個人の興味によるプロジェクト) 教育の一つの重要な目標は、個人の必要や興味を満たすことである。個人的なプロジェクトによる作業のために、或る程度の学習時間を設けることはよいことで、とくに新しい事実や知識や技能を獲得するばあひには望ましいことである。

普通の子供にとつては、個人的なプロジェクトは多くのばあひ、理解や計画や問題解決や測定のための読書が必要とする。それはプロジェクトの全ての段階において、アカデミックな知識の実際的な応用が必要になつてくるからである。

工作教育の目標

工作プログラムは、思考能力、自己表現の能力、企画力、問題解決の能力、工具の使用に際しての技能や安全に対する注意力、材料の使用に際しての節約と経済、正確さと几帳

面さをともなつた仕事をする能力、実際的な目的のために仕事をする能力、よく成し遂げた仕事を評価する力などの諸能力を発達させるのに役立つものである。(鈴木訳)

杉山一人編著

職業家庭科指導の 実際

(B6判二〇七頁
定価金一六〇円)

特価百円(送料共)

——十一月三十日迄——

申込は左記へ

振替東京七七一七六

職業教育研究会

職業教育研究会支部規定

一、支部は会員の同志的親睦と職業科教育の推進を図るため、地域在住の会員によつて自主的に結成されるもので、本部よりは、何等の制肘を受けるものではない。

二、支部は郡・市・区を単位とし、五名以上の会員によつて組織される。(本研究会著作教科書採用校は一名を会員と見なす)

三、支部は、支部名・支部代表者・組織会員名を本部に報告し本部より機関誌毎号五部宛の無代配布を受ける。但しそれ以上は会費納入を要す。

四、支部規約及び運営は支部の自由とし、解散した場合はその旨を本部に報告する。

五、支部で計画される研究会・講演会等には本部より講師を派遣指導に当る。

東京都千代田区一ツ橋教育会館内

職業教育研究会

各地講演会

十月三十日には、山梨県甲南中学校で開催される講習会(産業教育中心)に、文部省職業教育課の長谷川淳氏、本研究会常任理事池田種生氏を講師として派遣する。

十一月四日より、大分県、宮崎県に国学院大学助教授清原道壽氏(本研究会理事)及び大分大学教授後藤豊治氏を派遣する。中旬には、栃木県矢板中学校、宮城県白石中学校で計画されつつあり。日時、講師は現在未定。

寄贈資料

本校の職業家庭科 (栃木県安蘇郡田沼町立田沼中学校)

職業家庭科教科課程 (京都府船井郡組合立園部中学校)

職業家庭科経営 (京都府船井郡組合立園部中学校)

教育計画作成の手引—西遠地区案—(昭和廿七年九月)

(静岡県西遠地区職業家庭科教育計画作成委員会)

カウンセラーと生徒の家庭環境

(静岡県浜松市北部中学校)

研究会だより

本号は、農業問題を中心に、かなり充実したものになった。

前号予告通り、福島要一氏の農村の分析と、生産教育へのチクリと痛い批判は、われわれがこの問題ととりくむ場合忘れてはならない点であろう。

中村邦男氏の栽培についての学習案も力作で、更にそれを補う意味の座談会記事を入れ、これらが福島氏の説とかみ合わされて、農村中心の職業科の中の農業に対する考え方と実践に役立てば幸である。

▽
つぎにアメリカの雑誌による小学校の工作教育を紹介した。これは直接関係があるということではなく、他山の石として玩味して貰いたいからである。つまりインダストリアル

・アーツの一つとして紹介したもので、寧ろわが国教育の全野に亘つて考えるべき資料といえる。

▽
次号には、日教組の第二回教育研究大会に備えて、平和と生産教育の問題を掘り下げ、中学校の職業科で果すべき点を指摘したいと思つている。また、これに対する諸説もまちまちであり、各教育雑誌で盛に取上げているし、産業教育振興法による実験学校も多くなつて来た。それらの資料や情報をも要約して掲載して十分参考になるものを作りたいと思つている。

▽
毎度のことながら会費の集りがわるい。郵税位おくつてくれてもよかりそうなもの。御一考をわずらわしたいものである。

▽
簡単な支部規定を作つた。(別掲参

照)形式より内容を。同志的結合こそが望ましい。どらたでも手軽にどしどし手をつけてほしい。

▽
会誌のバックナンバーを希望される方が多いが、現在第七号から第十一号までなら揃えられる。各冊二十円の割で送金(切手なら十円以下のもの)願いたし。

× × ×

昭和27年10月25日印刷
昭和27年10月30日発行

【金二十円】

編集兼
発行者 池田 種 生

東京都千代田区一ツ橋
教育会館

発行所 職業教育研究会

振替東京七二六番

職業教育研究会編集教科書

教科書 番号	学年	教科書 名	判型 頁数	定価	一頁 当り 単価
七中 二〇職	一年	楽しいしごと (家庭向)	二A 一八五	60円	36 銭
八中 一三職	二年	新しいくらし (家庭向)	二A 二四五	80円	35 銭
九中 一三職	三年	生活の設計 (家庭向)	一A 一八五	80円	40 銭
七中 二一職	一年	しごとの喜び (都市向)	二A 二五二	88円	34 銭
八中 一四職	二年	働くちから (都市向)	二A 二五四	88円	34 銭
九中 一四職	三年	将来にそなえて (都市向)	二A 二六五	88円	37 銭
七中 二二職	一年	村のしごと (農村向)	二A 二四八	88円	35 銭
八中 一五職	二年	大地とともに (農村向)	二A 二五四	88円	34 銭
九中 一五職	三年	明かるい農村 (農村向)	二A 二五六	88円	34 銭
七中 四三職	一年	将来の希望 (改訂版)	九A 八五	35円	35 銭
七中 〇五職	二年	自己をみつめて	八A 六五	30円	34 銭
七中 〇六職	三年	進路の決定	五A 四五	20円	37 銭

☆ ☆ ☆
本教科書の定価について

教科書の定価は、文部省によつて今年度から一ページ当りの最高価格が決められました。ですから、各社発行の教科書の定価のちがいはページ数の多少によつてのみ生ずるのであります。

弊社の教科書の特色は、教科書の正しいあり方の立場をまもり、学習指導要領に決められた教育内容に忠実に準拠し、

1、しごとについては、代表的な基礎的技術を網羅したこと

2、インフォメーションについては、他社刊行の教科書と異なつて豊富な資料を提供していること。

以上の理由から、他社刊行の教科書に比べるとページ数が多くなり、従つて定価も高くなつてゐることを御諒承下さいませう御願ひします。

(職業・家庭科の一ページ当り最高価格は四五銭と決定されました。本教科書の一ページ当りの価格と御比較下さい。)

☆ ☆ ☆

発行所

33
立川

東京都中央区
銀座東 5 の 5

立川図書株式會社